

〔学 会〕

東京女子医科大学々会第107回例会抄録

日時 昭和36年5月25日(木)午後2時

場所 東京女子医科大学病院第一臨床講堂

1. 本邦全結核および臓器別結核死亡率性比の研究

(衛生) 明石み代

明治32年より昭和30年までの57年間の全結核および各臓器別結核死亡率を性別に観察した結果を報告する。

$$\text{性比} = (\text{男死亡率} / \text{女死亡率}) \times 100$$

全結核では、死亡率は男子は昭和18年、女子は大正7年に最も高い。性比は昭和6年まで100以下で昭和7年以降は100以上で逐年上昇する。

呼吸器系の結核では、死亡率は男子は昭和18年、女子は大正7年に最も高い。性比は大正9年まで100以下で、大正10年以降は100以上で逐年上昇する。

腸および腹膜の結核では、死亡率は終始女子が男子より著明に高い。男女ともに大正7年に最も高い。性比は終始低く50~60代で経過し昇降も少ない。

髄膜および中枢神経系の結核では、死亡率は男子は昭和14年、女子は大正7年に最も高い。性比は明治より大正年代と戦後は10前後で、昭和初めより18年までは100以上で上昇する。

全結核および各臓器別結核死亡率性比の相互比較。

1. 明治以降昭和15年までは髄膜および中枢神経系、呼吸器系、全結核、腸および腹膜の結核の順で昭和16年以降は呼吸器系、全結核、髄膜および中枢神経系、腸および腹膜、の結核の順位となる。2. 各性比とも昭和15年までは平行、以後は全結核、呼吸系の結核は上昇し、他は下降する。3. 性比が100以上になる時期は、髄膜および中枢神経系では大正10年、全結核は昭和7年である。腸および腹膜の結核は100を越えることはない。4. 呼吸器系の結核死亡率性比は、全期間を通じて全結核死亡率性比と同傾向を示し、全結核死亡率性比より常に高い。

2. コルサコフ症状群をもつて始まった進行麻痺の一例

(精神科) 岡崎正隆

A. Bostroem によれば、進行麻痺にコルサコフ症状群とくらべる程に高度、且つ孤立した記憶力障害が来るのはまれであつて、其の多くは譫妄状態、或いは其の他の特別な外因性反応型に引続き起るか、そうでなければ酒精中毒、動脈硬化症等の合併症を有する症例であるという。

本例(発病時36才の男子)は、進行麻痺の軸症状である痴呆が未だ其れ程目立たない時期に、鮮明なコルサコフ症状群の出現を見た一例で、しかも瞳孔症状、言語障害其の他の粗大な神経学的異常所見未だ認められなかつた時期に於ける発現という比較的稀な症例であるので報告した。

3. 乳児横隔膜ヘルニアの一治験例

(外科) 織畑秀夫・蛭名勝仁・○堺裕

(心研) 高尾篤良

(麻醉科) 岩淵 汲

最近われわれは呼吸循環系障害の著しい乳児横隔膜ヘルニアを緊急手術にて救命し、その予後の良好な経過を示した症例を経験したので若干の文献的考察を、特に小児外科の立場よりつけ加えた。

症例 2カ月の男児 主訴 チアノーゼ 呼吸困難及び嘔吐。既往歴では、チアノーゼが強くフェロー氏四徴症と誤診されていた。開腹手術により、巨大な左横隔膜真性ヘルニアで、先天性 Bochdalek 氏孔横隔膜ヘルニアであつた。術後1年の経過を観察したが良好で、順調な発育を示している。本症の手術成績は、当教室で行つた全国主要病院250の間合せ集計により新生児先天性横隔膜ヘルニア手術死亡率は57%、又昭和30年より昭和36年5月までの本邦文献による乳児の本症の手術死亡率は33%であつた。

4. 当教室における鼓室成形術の手術成績について

(耳鼻科) 相原静江

昭和35年2月より10月に至る9カ月間に行なつた鼓室成形術症例のうち、術前及び術後の一定の時期に聴力検査を行なつて、本手術による聴力の推移を検討中の11才より46才に至る慢性中耳炎の患者で、外耳道切開法を用い、遊離皮弁を使用、Wullstein 氏の術式を基礎とし、無選択的に本手術を施行した者を対象とした。

手術所見としてI型1耳、II型22耳、III型11耳、IV型6耳であつた。Antrum 及び乳様峰竇の病変は殆んど全例にみられ、特に真珠腫は半数にみられた。耳小骨の状態も種々で、その連鎖完全のもの14耳、離断23耳、耳小骨消失3耳であつた。

術後の聴力の変化はI型、II型、III型、IV型及び緊張部残存例にわけてみた。又月別にも変化をみ、表にて示